

静岡市北部・井川方言における可能表現

谷口ジョイ（静岡理工科大学）

令和7年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会
2026年3月15日

1. 研究の背景

メディアの普及や都市部への人口流出により、地域変種（方言）の衰退・消滅が各地で進行している。国内の危機言語・方言を対象とした調査研究は、国立国語研究所を中心に進められており、文法記述・辞書・談話資料の整備・電子化、およびアーカイブの構築・公開が進められているが（国立国語研究所, 2022）、静岡県内の方言については、共通語化が著しく進行し話者が急減しているにもかかわらず、その記録・保存は十分に行われていない。とりわけ、静岡市北部で用いられる井川方言は、深刻な消滅の危機に瀕していることが指摘されている（谷口・山岸, 2025）。

静岡市北部に位置する旧井川村（現・静岡市葵区井川, 図1参照）は、地理的条件から他の地域との交流が長く断絶されていた「言語の島」である（岩井, 1941）。そのため、長期間にわたり、周囲とは異なる方言が維持されてきた。しかし、1950年代のダム建設とともに外部からの労働者が一時的に移住し、交通手段の整備が進んだことなどから、方言の使用は急速に衰退した（Taniguchi, 2025）。

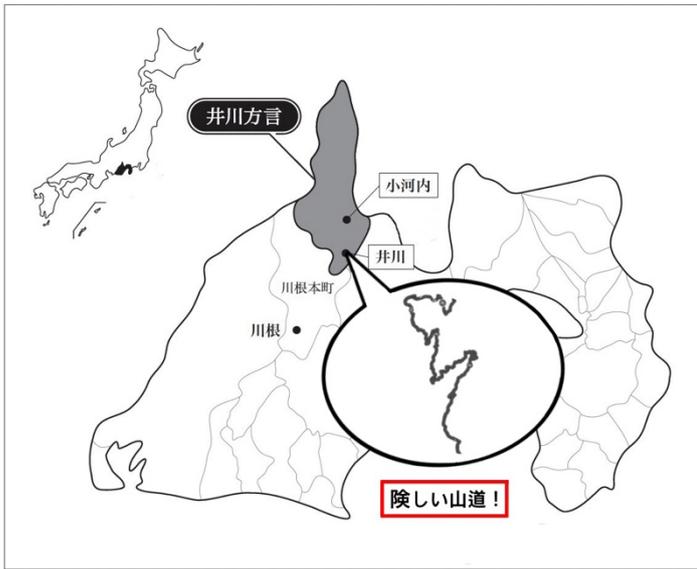


図1 井川方言の区画（『井川方言基礎語彙集』を改変）

井川方言は、中部地方では唯一、無アクセントであり、語や文法も周辺の中中部方言とは特徴が異なる。しかし、井川地域の少子高齢化は、過去に類を見ないほど進行しており、方言体系の記述は急務である。

本研究の目的は、静岡市北部の井川方言における「可能表現」の使用・理解について明らかにすることである。井川方言の可能表現には、kuw-eru（クエル）や kuw-i-Neeru（クインエール）のように、語幹に接尾辞-eru、-Neeruを後続させる形式と、kuw-asaru（クワサル）のように、-asaruを後続させる形式がある。しかし、両者の意味機能やその使い分けについては、依然として不明な点が多い。

2. 井川方言の可能表現

中田(1981)によれば、井川方言には可能を表すものとして以下の3種類の形式が存在する。

- ① -(r)eru, -(r)areru 形式：jom-eru「読める」、jom-a-reru「読まれる」、jom-a-ra-reru「読まれる」
- ② -neeru 形式：jom-i-neeru「読みんえーる」
- ③ -(sa)saru, -(ra)asaru 形式：jom-a-saru「読まさる（読まーさる）」、jom-a-sa-saru「読まささる」、jom-a-ra-saru「読まらさる」

このうち、③の-saru形式は周辺地域には見られない形式である。活用を表1に示す。

表1 井川方言の可能形式

活用	動詞(食う)	形式①②	形式③(-saru)
非過去	kuw-u	①kuw-eru / ②kui-neeru	③kuw-aasaru
否定	kuw-a-noo/nec	①ku-e-noo / ②kui-nec-noo	③kuw-aasar-a-noo
過去	ku-Q-ta / ku-Q-ke	①ku-e-ta / ②kui-nec-ta	③kuw-aasa-Q-ta
過去否定	kuw-a-noo-Q-ke	①ku-e-noo-Q-ke / ②kui-nec-noo-Q-ke	③kuw-aasar-a-noo-Q-ke

3. 調査の概要

3.1 調査1：-saru形式の使用・理解調査

【調査1】は、1935年～1953年生まれの母方言話者13名（調査時点2024年2月時点で70～80代）を対象に実施した。全員が言語形成期を井川集落で過ごし、現在も当地に居住している。

中田（1981）に基づき、-saru形式が出現するとされた6文【設問(1)～(6)】と、出現しないとされた4文【設問(7)～(10)】の計10文を提示し、各文について、(1)使用する、(2)使用しないが、聞いたことがあり、違和感もない、(3)聞いたことはあるが、違和感がある、(4)聞いたことがない、の4段階で評価を求めた。

各設問の内容は以下のとおりである。

【-saruが出現するとされた文】

- (1) 人間は、一歳になれば、歩かさる（アルカーサル）。
- (2) 工事が終わったもので、この橋は、もう渡らさる（ワタラーサル）。
- (3) 干しちゃだめなところだから、干さらん（ホサラノー）。

- (4) 字が小さくて、読まさらん (ヨマーサラノー)。
- (5) 名前を書く欄が小さすぎて、書かさらん (カカーサラノー)。
- (6) このリンゴは、腐ってないから、食わさる (カーサル)。

【-saru が出現しないとされた文】

- (7) 夜中にお墓なんて、怖くて、行かさらん (イカーサラノー)。
- (8) 忙しくて新聞なんか、全然、読まさらん (ヨマーサラノー)。
- (9) この漢字は難しくて、書かさらん (カカーサラノー)。
- (10) リンゴが好きだもんで、いくらでも食わさる (カーサル)。

3.2 調査 2：翻訳タスクによる可能表現の実態調査

【調査 2】は、1937 年生まれの話者 1 名 (NU 氏) を対象に、2025 年 5 月～6 月の計 3 回、対面による面接調査として実施した。共通語の文 21 例を提示し、井川出身の親しい人に対して使用する場合を想定し、自然な発話に翻訳していただいた。設問は、渋谷 (1993, 2005) における possible の意味類型 (能力可能・状況可能・許容可能・心情可能など) に基づいて設計した。

4. 結果と考察

4.1 -saru 形式の世代差(調査 1)

表 2 は、先行研究により -saru 形式が出現するとされた設問(1)～(6)の調査結果、表 2 は出現しないとされた設問(7)～(10)の結果である。

表 2 -saru 形式が出現するとされた文の調査結果

話者(生年)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
NC (1935)	1	2	3	3	2	2
NU (1937)	1	1	1	1	1	1
MA (1937)	1	1	1	1	1	1
SS (1938)	2	2	1	2	1	2
EH (1940)	3	1	1	1	1	2
NE(1942)	2	4	4	2	2	2
NT (1942)	2	3	2	2	4	3
MJ (1945)	2	3	4	4	4	2
NH (1946)	2	3	4	4	4	2
MH (1949)	2	1	4	1	1	2
AS (1950)	2	3	4	4	4	2
MM (1952)	4	4	4	4	4	4
MN (1953)	4	4	4	4	4	4

1 使用する 2 使用しないが違和感もない 3 聞いたことがあるが違和感がある 4 聞いたことがない

表3 -saru 形式が出現しないとされた文の調査結果

話者(生年)	(7)	(8)	(9)	(10)
NC (1935)	3	3	2	2
NU (1937)	4	4	1	1
MA (1937)	4	4	4	4
SS (1938)	2	1	1	1
EH (1940)	4	1	4	1
NE (1942)	2	2	2	2
NT (1942)	4	2	2	1
MJ (1945)	4	4	4	3
NH (1946)	4	4	4	4
MH (1949)	3	4	4	2
AS (1950)	4	4	4	4
MM (1952)	4	4	4	4
MN (1953)	4	4	4	4

1 使用する 2 使用しないが違和感もない 3 聞いたことがあるが違和感がある 4 聞いたことがない

結果からは、-saru 形式の使用に顕著な世代差が認められる。1935～1940 年生まれの話者では(1)～(6)における「使用する」または「違和感もない」の割合が高く、特に 1937 年生まれの NU、MA は 6 文すべてで「使用する」と回答した。一方、1942 年以降生まれでは積極的使用が見られなくなり、1952・1953 年生まれの 2 名はすべての設問で「聞いたことがない」と回答している。わずか 15～18 年の世代差でひとつの文法形式がほぼ完全に消失しているという結果は、井川方言の急速な衰退を示すものである。

4.2 中田 (1981) の妥当性の検証

中田 (1981) が -saru 出現と予測した設問(1)～(6)では、高齢層を中心に比較的高い受容度が確認され、先行研究の妥当性が概ね支持された。特に設問(2)「工事が終わったので橋が渡らさる」や設問(6)「腐っていないのでリンゴが食わさる」のような対象の状態変化に基づく可能は使用・理解の度合いが高かった。

一方、同じく受容可能に分類される設問(4)「字が小さくて読まさらん」や設問(5)「欄が小さすぎて書かさらん」は、やや使用・理解の度合いが低い傾向があった。このことから、-saru 形式は対象の状態(状況)変化に伴う可能性を表す文脈においては、高年層に保持されていることが示唆された。

また、設問(7)「怖くて行かさらん」(心情可能)や設問(8)「忙しくて読まさらん」(状況可能)は、世代を問わず使用・理解の度合いが低かった。これは、-saru 形式が心情的な条件による不可能表現には用いられにくいことを示す。ただし、中田 (1981) が出現しないとされた設問(9)(10)において高齢層の一部が「使用する」と回答しており、完全な一致には至らなかった。

4.3 可能表現の形式選択(調査 2)

調査 2 の結果から、井川方言における可能表現の形式選択は、意味類型（能力可能・状況可能・許容可能）よりも、「行為が実現しないことを能力・規範の問題として把握するか、ある状態や事象の記述として把握するか」という語用論的判断に大きく依存していることが明らかとなった。結果を表 4 に整理する。

表 4 調査 2 にみる可能の意味類型と形式選択の傾向

可能の意味類型	下位分類	用いられた形式	代表例(調査 2)
能力可能	個別・全称	-(r)eru 形	tob-e-no:, aik-e-no:
許容可能	許可・禁止	-(r)eru 形	hair-e-ru, ku-e-no:
心情可能	—	-(r)eru 形/否定	iQk-e-no:
状況可能	内的条件	否定・その他	ik-a-no:
状況可能	外的条件	否定	de-ne:, jom-a-no:

以下に実際の発話を示す。

【能力可能】

honna haja-ku ura tob-e-no:=zo.
 そんな 早い-ADV I 飛ぶ-POT-NEG=FP

「そんなに速く私は走れない。」

【心情可能】

honna jonaka=nja: ohaka=domo=je
 そんな 夜中=DAT=TOP お墓=EMP=ALL

iQk-e-no:=zo: ura. oQkane:=de. kimoci
 行く-POT-NEG I. おっかない=CSL. 気持ち

wari:=de.
 悪い=CLS.

【状況可能】

sot=a: de-ne:. kjo:=wa o:juki=da=de.
 外=TOP 出る-NEG 今日=TOP 大雪=COP=CSL

「外は出ない。今日は大雪だから。」

5. まとめと今後の展望

本発表では、消滅の危機にある井川方言の可能表現について、調査 1・調査 2 の結果をもとに以下の点を明らかにした。

(1) -saru 形式は急速に衰退しており、1940 年代生まれを境界として世代間での使用が大きく断絶している。1952・1953 年生まれの話者はすべての調査文で「聞いたことがない」と回答した。

(2) -saru 形式は受容可能・許容可能・全称的能力可能において使用されるという中田(1981)の指摘を概ね支持する結果が得られた。特に、対象の状態変化に伴う可能表現における使用が顕著に見られた。

(3) -saru 形式以外の形式選択においても、井川方言では意味類型に単純に対応するのではなく、語用論的判断が形式選択に関与している。

今後は、自然談話データを用いた分析による補完が必要である。翻訳タスクで得られる発話は必ずしも自然談話を反映しないことから、実際の会話に現れる可能表現の分析が必要である。

参考文献 (当日使用するものも含む)

秋永一枝(1986)「アクセント概説：史的变化と方言分布」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮 一編『講座方言学1 方言概説』国書刊行会.

岩井三郎(1941)「静岡県井川村方言の考察」『方言研究』4, 157-176.

尾上圭介(1998)「文法を考える5 出来文(2)」『日本語学』17-10、明治書院.

木部暢子(2006)「九州方言の可能形式『キル』について：外的条件可能を表す『キル』」『筑紫語学論叢II』風間書房.

国立国語研究所(2022)「消滅危機言語の保存研究」<https://www.ninjal.ac.jp/research/cr-project/project-4/endangered-languages/>

佐々木冠, 渋谷勝己, 工藤真由美, 井上優, 日高水穂(2006)『方言の文法』岩波書店.

Shimoji, M. (2025) IGT Builder. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.16925638>

静岡市(2025)「静岡市の人口・世帯 町名別人口(男女別)・世帯数(葵区・駿河区・清水区)」
<https://www.city.shizuoka.lg.jp/s2934/s013062.html>

渋谷勝己(1993)「日本語の可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1).

渋谷勝己(2005)「日本語可能形式における文法化の諸相」『日本語の研究』1-3.

谷口ジョイ(2021)「静岡県井川方言に見られる言語変異・変化」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集』第113巻, 日本方言研究会.

谷口ジョイ・山岸祐己(2025)「静岡・井川方言に見られる急速な言語シフト：世代間継承の断絶および活性化プロジェクト」『シンポジウム「移動・境界・言語」論文集』29-48.

Taniguchi, J. (2025) *The Linguistic Shift in a Language Island: Changes in the Community through Research and Language Revitalization Project In Transcending Language Education in Japan: Borderland Accounts of Being, Becoming and Belonging*. Bloomsbury Publishing.

中條修(1982)『静岡方言の研究』吉見書店.

中田敏夫(1981)「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」『都大論究』18, 1-13.

林青樺(2007)「現代日本語における実現可能の意味機能—無標の動詞文との対比を通して—」『日本語の研究』3(2), 31-46.

宮本勉(1975)『史料編年井川村史第二巻』名著出版.